巻頭特集 池田市の地域医療の未来をつくる

市立池田病院

少子高齢化社会が進み医療に対する不安が高まる昨今。これからの医療には何が必要なのか……。地域医療に力を入れる市立池田病院に話を聞いた。

地域の医療拠点として 各医療機関と連携し患者を診る

市立池田病院
病院長　今井康陽 さん

北摂の医療拠点として始まった市立池田病院

市立池田病院は戦後、医療法が制定されて間もない昭和26年に、北摂地域の医療センターとして開院。その後、地域医療連携室を設置し、医療連携と急性期化に注力。平成21年には大阪の公立病院では初めて地域医療支援病院の承認を受け、約300の登録医療機関との連携を図りながら、月1000件にのぼる患者を受け入れ、全国でも数少ない紹介率60%を越える病院でもある。患者の情報の管理・共有を円滑にするため、電子カルテを導入するなど、伝統・文化を継承しつつも、新しい事にチャレンジしている。

様々な患者に対応できる専門性に特化した治療体制

内科、小児科、外科、皮膚科など、21の診療科をはじめ、前立腺がん二次検診センター、生活習慣病・糖尿病センター、乳腺・甲状腺センターなど、最適な医療を提供できるよう、専門性に特化し力を注いでいる。特にがん診療については、大阪府から「がん診療拠点病院」に指定を受けており、急性期病院（＝緊急・重症な状態にある患者に対し入院・手術・検査など高度で専門的な医療を提供する病院）としてサポート体制を整えている。

医療は「単体」から「連携」へ。地域で患者を支える

「世帯構成や人口構造の変化、医療技術の進歩が進む中、これからは当院単体でビジョンを描くのではなく、ヘルスケアサービス全体を見て、地域包括ケア体制をどのようにこの地域で実現するかが重要だと考え〝メディカル・タウン〟構想を掲げました。自治体病院として近隣地域を〝安心で豊か〟なものにすべく、かかりつけ医の先生や病院、施設、各種団体、行政等と連携し、充実した医療サービスを享受できる街づくりを目指しています」と語る今井病院長。利用する患者としては心強い事だが、医師会、歯科医師会、薬剤師会、消防署、池田市福祉部、保健所、ケアマネジャー、訪問介護など、すべての医療部門との連携が必要になると聞くと、とても容易なことではないように感じてしまう。しかし、今井病院長は「まだ全ての部門とはいきませんが、着実に進んでいます。各医療部門と積極的に懇談会やセミナーを行うことで賛同してくれる医療関係者を増やしていますし、市域の規模や住民の人数がコンパクトな池田市は、他市に比べ、形にしていき易いんです」と力強く話す。

積極的に地域の医療部門と手を取り、地域医療に尽力している姿勢に、これからの池田市における医療には、光がさしているように感じた。

市立池田病院
〒563-8510 池田市城南 3 丁目 1-18
072-751-2881（代）
http://www.hosp.ikeda.osaka.jp/

池田市内外の医療関係者の相談役となり「かかりつけ医」と一緒に患者を支える

地域医療連携室長
看護次長　林由美 さん

地域医療の連携の要は「かかりつけ医」の存在である

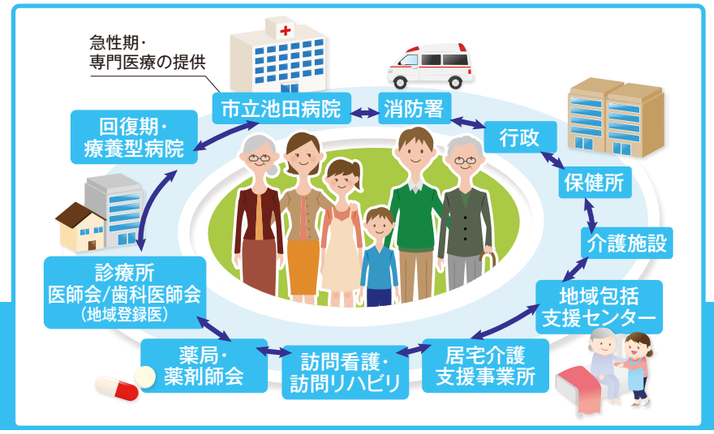
「かかりつけ医」とは、住み慣れた地域で普段から身体の相談ができる医師のこと。身近にいる医師が患者の体調を把握していることで、早く異変に気づくことができ、急性期病院での医療が必要な場合は、市立池田病院内にある地域医療連携室に相談し、専門性の高い診療につなぐことができる。

例えば、地域の医療機関で「がん」の診断を受け手術が必要な場合、「かかりつけ医」は連携している市立池田病院の専門医を紹介する。その際、診療情報提供書（＝紹介状）が作成され、治療経過や症状、内服薬など、手術に必要な情報を共有するので、患者は早くから適正な治療を受けることができる。また、治療が終了すると、市立池田病院から紹介元の「かかりつけ医」の医師に診療情報提供書を作成し、「かかりつけ医」と共に療養生活を支えている。

「かかりつけ医」の相談役 地域医療連携室

病院長を始め、病院で働くスタッフはできる限り、患者の容態について「かかりつけ医」の相談に乗れるようにしていると言う。互いの信頼関係の上で連携が成り立っていることが伺える。相談役となる市立池田病院は池田市内外の医師にとっても「かかりつけ医」といっても良いのではないか。

「何でも相談できる医師を見つけることが一番難しいのでは？」と問うと、林さんは「確かにそうだと思います。ですので、まずは近くのお医者さんに相談することから始めてみて下さい。専門家同士がきちんと情報を共有しているので安心してまずは、何でも話してみて下さい」と優しく応えてくれた。



複数の医療関係者の「連携」で患者を支える
メディカル・タウン構想

外科の中核病院として「がん」と向き合い 家族と一緒に緩和ケアを行う

消化器外科
主任部長　太田博文 さん

患者一人ひとりの生き方を尊重するケアを目指して

乳がん・前立腺がん・肺がん・大腸がん・胃がん・肝がん・膵がん・血液がんなど様々ながんに対応できるよう、それぞれの専門医が在籍し高度な診療を行っている。「がん」は根治切除が可能な場合と、そうでない場合とで治療方針が異なるという。

根治切除が可能な「がん」の場合、早期に社会復帰が可能となるERAS（イーラス）という術後回復強化プログラムを導入している。術前にしっかりカウンセリングを行った上で、麻酔科医や看護師、栄養士といったチームが連携し、患者をトータルサポートする。そうすることで、術後の合併症を抑えつつ、回復を早め入院期間の短縮が可能となる。結果、患者の経済的・時間的負担も軽減できるという。

回復が難しい「がん」に対しては、人生のゴール（＝終末期）を見据えた上で、カウンセリングを中心に、抗がん剤を使用しながら緩和ケアを行う。「今の抗がん剤は、昔に比べかなりの時間を作ることができるようになり、人生のゴールをどう迎えるのかを考える時間を、患者さんと家族に提供することが可能となりました」と太田先生。

太田先生は近隣のホスピスやかかりつけ医らと連携し、患者1人ひとりの生き方を尊重しながら、緩和ケアも行っている。「治療を行った医師が、緩和ケアまで入り患者さんとその家族と相談しながら、ゴールまで一緒に付き添い、信頼関係を作っていくことが、何よりも大切だと考えています。信頼関係が無いと、患者さんが安心して自分の人生を考えることができません。自宅で人生のゴールを迎える場合でも、治療を行った医師、家族、かかりつけ医、介護士などが信頼関係で結ばれていたら、幸せな生活を最期まで送ることができる」と語る。

私達が住み慣れた場所で暮らしていくために

「少子高齢化が進み医療を受ける人が多くなると、適切な医療を受け難くなるのでは」と言われている中、健康的に過ごしたいと誰もが願っている。池田市では将来を見据え、早くから患者に合った医療を適切な場所と時間で受けられるよう、各医療関係者が役割分担を決め、専門家同士が結束して、医療連携の仕組みを作っている。私達がすべきことは、健康であっても大事に至る前に「かかりつけ医」を見つけることだ。まずは、日頃通っている病院の先生に、自分の体調について話すことから始めてみよう。

文・デザイン／白石卓丸　写真／Ayami　写真協力・提供／市立池田病院